



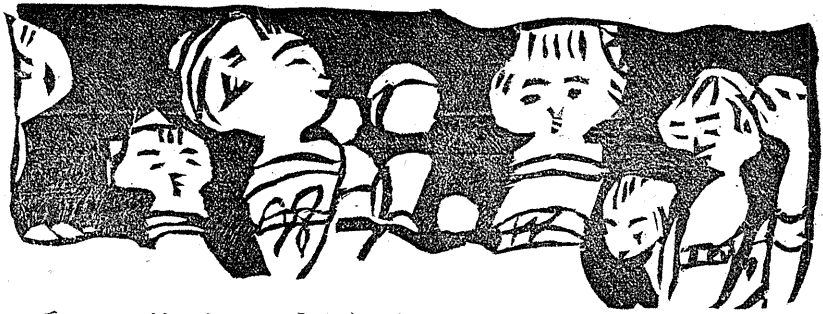
……卷頭言……

代表作の問題

塚 本 勝 義

漱石の代表作は「道草」だという人がある。いや、なんといつても「明暗」だと決める人がある。宇野浩二などはいとも勇敢に「吾輩は猫である」「坊つちやん」「草枕」の三作だと断言する芥川龍之介の作品になると殆んどまとまつた見解が示されておらぬ。みんなが、銘々勝手に、これこそ芥川の代表だと決めこんでる。菊地寛の代表作などもぐらつきが多い。

初期の短篇から選び出す人もあれば、小林秀雄のごとく「真珠夫人」以後の作に求める人もある。ここで一言しておきたいことは、いわゆる代表作の指摘なる行為は、多くの場合、批評家によつてなされ、国文学研究者はその尻馬に乗つて騒ぎ立てている傾向が顕著な事実だ。尾崎紅葉の代表作を「多情多恨」と決めて、「金色夜叉」をくさしていたのが、いわゆる研究者の群だつた。ところが、正宗白鳥が、「金色夜叉」こそ紅葉の代表作だと言すると、鶴の一声で、われもわれもと「金色夜叉」を代表作に祭り上げてしまった。まことにだらしない始末だが、事実は正にかくのごとだ。今年あたり小林秀雄が、「なほに、紅葉の代表作は多情多恨さ。」なんて放言しようものなら、またして



風向急ぎ變と來ること必定だ。

とにかく、近代作家の代表作なるものは、人に依つて異なるし、その人の發言の時によつて異なる場合もある。だから、只今いわれている代表作なるものは、讀みとる人の見解による代表作であつて、作家自身の代表作とはいえかねると解すべきだろう。宇野浩二は「地獄變」を芥川の代表作に數えていたように記憶するが、それだつて宇野の觀た芥川の代表作であつて、巫女の口を借りたる芥川の死靈が、なんと述懐するか、知れたものでない。また、考えてみれば人間という不完全きわまる動物は自分の顔つきさえしつかと捉えておらんのだから、「これこそ自分の代表作だ」と作家自ら指摘したつて、迂濶に信用なんかできない。時代の最大多數の人間に訴える力ある作品こそ代表作だとおつしやる人があるかもしれないが、訴える力あるうちは筋の通る理窟ともきこえるが訴える神通力を喪失したら何作と呼んだらいいのだ。所詮は、その時代の讀みとつた代表作たるに過ぎぬ。時代の代表作だろうが、しかし作家の代表作とはいえぬ。

ここでわれわれは覺悟しなければならんことがある。それは他人の指摘した代表作なんかばかり讀んでいたのではいつまで経つてもその作者の本質に触れられぬということだ。手間のかゝるやり方が、芥川を論じようとなら、芥川の全作品にぶつからねば駄目なんだ。他人様の指示ばかり遵奉していたのでは結局後塵を拜するにとどまる。新しい発見ができぬ。いわゆる代表だけで結論を出すのは手つとり早い。能率的だろう。しかし、非科学的結論しか出し得ぬことも確實なんだ。

(顧問教官)